信仰の実りとして

ご一緒に、ペテロの手紙を読み始めていますが、最初の挨拶を終えると１章の３節以下、新共同訳聖書ですと「生き生きとした希望」という部分から、ペテロは全力で、剛速球を相手のミットめがけて投げ込んでいく感じです。３回に分けて、この箇所を読んでいきますが、今日がその２回目で前回からの流れを少しおさらいしつつ、今朝与えられている箇所に聴いてゆきます。

この単元でペテロが目指していることは何か、手紙を書いた目的になるわけですが、それは一言でいってしまうと、わたしたちの生活が地上に根ざした生き方、わたしたちの努力の結果や、生きるじたばたどたばたの集積として辿りつくあり方ではなくて、天に根ざしたあり方、キリスト・イエスに接続されることによって、すべてが変えられてしまっている。そこに気づかせて、軸足を、キリスト・イエスによって、神が豊かな憐れみと慈しみによって招き入れて下さる天の消息に移してゆくこと。それを神さまは、わたしたちに信仰を与えて下さることによって開かれた。キリストの十字架と復活によって開かれた新しい地平、天に国籍を持ち、死を終わらせ、わたしたちを全く新しい創造へと招く出来事の相続人としてくださっている。それこそが天に蓄えられている朽ちず、汚れず、しぼむこともない資産ですね。この恵みの出来事を非常にテンション高く、歌い始める。主題への招きが「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」という賛美で始めている。地面からのろのろスピードを上げて離陸するのではなくて、最初から高度１万メートルをマッハで飛行するような勢いで､キリスト者に約束されている新しいステータス､財産、

希望を明らかにするのです。幾つかのキーワードが登場します。キリスト者とはすべて本質的には、ディアスポラのパレピデ―モスだということ、これは「離散した仮住まいの者たち」であること、つまり、この地上を宿り人として生きる存在であり、神の国こそが約束の地であること、それゆえに地上の財産は朽ちるし、汚れるし、しぼんでしまうものだから、執着しないことを勧め、かわりにわたしたちには「生き生きとした希望」が与えられていること。これこそが仮の宿りを生きるわたしたちの真実の希望であり、イエス・キリストの死者の中からの復活によって、とあるように、主が十字架で死を滅ぼしてくださったこと、すなわち復活信仰こそが、地上で終わる人間の命を、神の豊かな憐れみのうちに移し、キリスト・イエスとの交わりの中で生かされることによって、生き生きとした力と励ましを復活の希望から受けることの出来る。そのようにわたしたちを変えてくださることをペテロは告げてきました。そして、天と地上に生きるこの世界をつなぐもの、ちょうど海の上から海の底に空気をパイプで送るように、天からの消息をわたしたちに届けるものが神によって与えられる信仰であると述べて、神を賛美します。「あなたがたは終わりの時に現れるように準備されている救いを受けるために、信仰によって守られている」と「信仰」をキーワードに上げています。「生き生きとした希望」に与るために「信仰」を通して守られているというのです。今日の箇所の最後には「信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」と、わたしたちが試練や苦難のなかにあっても喜べる理由として、生き生きとした希望に信仰によって繋がれていることが魂の救い、これはどんな境遇にあっても平安であるということで、人間の終わりである死の問題が解決されていることからくる究極の安らぎと言って良いでしょう。それが信仰の実り

として、わたしたちに与えられているというのです。

金城学院に聖書の授業に行っていた時、信仰とは何かを説明するために、あるエクササイズをすることがありました。授業には聖書と出席簿をもって出かけるのですが、それを教卓において生徒たちに､みなさん､机に聖書があることを信じますか？とは訊きませんよね、と話をふります。それは見たら机の上に聖書があるのはわかりますから。では、わたしが授業の前に、あらかじめ教卓のなかに聖書を置いていたらどうでしょうか。そのとき初めて､みなさん､机に聖書があることを信じますか？ということが成立する。つまり、見ても机の上にはない、確認できない。しかし、先生は聖書があると言う。そこで目に見えなくなって初めて、相手の言葉を信じるか、信じないか、その判断になる。それは語る相手の人格、確かさ、相手との関係性において様々に判断されることになります。事柄が目に見えないとき、それは初めて信じる領域に移される。本当なのか、そうでないのか、信じることにはつねに賭けの要素が含まれる。相手の確かさに賭ける。そうしなければ人間関係は深まっていきません。また人間だからこそ言葉に人格を賭けて生きることが出来る。そして信仰は今、持っていなくとも、約束を望み見て、生きる力を未来から頂くという不思議な生き方すら可能にするものです｡「あなたがたはキリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないほどの喜びに満ち溢れている」という。それが信仰の真髄であり、信仰の実りがわたしたちに与える驚くべき力であるというのです。どうしたらそのようなことが可能でしょうか。

ヒントのひとつはまず旧約聖書にあります。

「聞け、イスラエルよ、我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主

を愛しなさい。今日、わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額につけ、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」

これは、「聞け、イスラエルよ」という呼びかけから「シェマ・イスラエル」と呼び習わされるユダヤ人にとって最も大切な教えであり、これを実際に守ってきたからこそ、彼らはどんな時でもどんな境遇でもイスラエルであり続けることが出来たと言って良いのです。言葉どおりの意味で、イスラエルのコンパス、羅針盤になった御言葉です。ここに見られるのは、全身全霊をあげて神の言葉に聴くことへの徹底です。「見よ、イスラエルよ、」ではない。聴くことが見ることにまさっているのです。これは百聞は一見に如かず、という姿勢とは全く違う。神の言葉は出来事となる、これが創造主である神の最大の属性なのです。ですから、この力ある神への信頼、天地万物の創造主への信頼があって、初めて、神の言葉、神の約束によって、まだ見ぬ将来の出来事がなることを先取りし、そこから慰め、励まし、今を耐えて、生きる力を汲み取る。それこそが信仰が汲み出す実りなのです。ペテロはこの旧約以来のイスラエルの伝統に立って呼びかけているのです。そして、ここが肝心なところなのですが、わたしたちが見えるものから、物質的な世界から、わたしたちの軸足を見えないものへ、神の言葉への信頼へと向かわせるもの、霊的な賜物の世界へとシフトさせるものは試練であり、苦難であるということがポイントなのです。この箇所では火で精錬される金属に喩えられています。「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まなければならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬

されながらも朽ちるもほかない金よりもはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです」とあるとおりです。地上における苦難を喜ぶものはおそらくいないでしょう。しかし、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです、とパウロも言っています。信仰とは、天に蓄えられている神が打ち立てた希望に接続するものであり、それはわたしたちが、わたしたちの終わりとして認識し、恐れている死の意味すらも書き換えるものであるがゆえに、真の慰めであり、神の憐れみの業と呼ぶべきものなのです。

今回、この箇所の説教準備をしていて、今朝が第４週で礼拝の中で逝去者を覚える時を持つからかもしれませんが、わたしは神が与えてくださった信仰によって守られ、魂の救いを受けているという消息に本当に生かされて召された何人かの教会員を思い起こしました。今はコロナのためにその機会が奪われているのですが、教会員が召される、死を迎える準備をする傍らにはべらせて頂くのは牧師の大切な､重く､光栄ある務めです。

その方にとって最後の入院となった訪問のことをよく思い起こします。ご家族から、もう持ちませんと医者から告げられたと連絡があり、ナースステーション脇の、要経過観察の病室にお訪ねしたのです。病院は基本的に治療して社会に戻すことを使命としていますから、亡くなる患者に対してはすることがない。状態を受け止めることの出来ない患者もおられますから、それは看護する側もいろいろと削られるわけです。わたしが訪問しますと、お顔がぱっと輝きまして、急にスイッチが入ったようになり、状態のチェックに来ていた看護士が驚いていまし

た。聖書のみ言葉を読み、祈ったのですが、その方がどこの個所ですか、と聞くので、ここを読みましたと寝ておられる頭上に開いた聖書をかざしましたところ、細い手でわたしの手の上から聖書をつかまれ、頁をめくろうとします。見ると物凄い勢いでくぼんだ目が聖書の行を追ってゆくのです。目で促されて次の頁を繰り、次の頁を繰り、10 分近くわたしは中腰の不自然なかっこうで頁をめくり続けました。忘れられない体験でした。死を前にしてみ言葉を貪るようにして追っていくその姿に、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日、わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額につけ、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」という、イスラエルの姿勢を見せて頂いた思いがします。病室を去る時に、何か言っておくことがありますかとお聞きしましたが、はにかむように微笑まれて、ないです、と仰られたですね。そうだろうと思いました。まさに「信仰の実りとして魂の救いを受けている」。神の豊かな憐れみによって「生き生きとした希望」、神さまの約束に接続され、キリスト・イエスのなかに信仰によってつながれていた。その方は信仰によって守られて平安だったのです。生涯を通して信仰者として生かされる恵みの有難さを覚えつつ、このような朽ちることのない宝へとわたしたちを召して下さっている主の御名を崇めます。

お祈りいたします。